

石井鶴三と木曾人の奥行き — 木曾馬神明号制作に関わって —

福江良純（北海道教育大学）

木曾における石井鶴三の業績には、島崎藤村木彫像制作事業を第一として、そこから派生するように取り組みられた木曾馬像制作事業がある。数年に亘ってなされた藤村木像に比べ、木曾馬像はわずか8日間に2体の粘土原型が成るという短期の事業であった。しかしながら、馬という動物に対する石井の思いの深さは、同じく生涯愛してやまなかつた山の高さに匹敵するものがあり、加えて木曾人の木曾馬に対する心を知るに及ぶ時、作品木曾馬からは時空を超えた広がりが見られる。本稿は、本誌第八号上の写真家基敦氏による小論「木曾馬の記念写真に見る創造性 —演戯する意識を失った現代とは—」で注目された集合記念写真に関し、その後に判明した事実を補完するとともに、木曾人と木曾馬の絆の奥行を記すものである。

1. 木曾馬と石井鶴三

石井鶴三は木曾馬の制作に関わって、次のような歌を残している。

木曾人は馬を愛しと重き荷をおのれにないて馬にはおわせじ

幼い時分の辛い体験であった養子先で、馬に心の慰めを得た石井ならではの眼差しがここにある。木曾人と馬の絆に対する石井の深い共感、この歌に彼らの生活の真実を織り込んだ。それほどまでに、木曾馬が制作された開田地方には、訪れる者の心を打つ物語が刻まれているのである。

2. 木曾馬像と記念集合写真

昨年度、基は小論「木曾馬の記念写真に見る創造性 —演戯する意識を失った現代とは—」の中で、作品《木曾馬Ⅱ》の粘土原型を囲う記念集合写真に、「劇の舞台」のような空間構成の効果を認めた^{注1}。写真中の人々は、それぞれ自分自身を「演戯」しているからなのだという。中西悦夫（当時木曾教育会役員）撮影によるこの写真には、石井を含めて11名の男女が写っている。この写真は、「開田村西野に於ける石井鶴三先生御制作の「木曾馬」関係の写真集」と表題され、木曾教育会に他の制作記録写真とともにアルバム形式で保管されているものである。よく知られた写真ではあるが、70年近く経過した今日、11名の人物を特定することは容易ではない。

そうしたところ、当時の制作の様子を見た記憶のある加村金正氏（県宝山下家住宅管理人）は、この舞台の登場人物のほぼ全ての名前と冒頭の歌に詠まれた木曾人の心を実感させるエピソードを筆者に語ってくれた。それらは、木曾人の物語として、その一切が《木曾馬Ⅱ》のモデルとなった神明号に集約されるものであった。このことに気付くなら、この記念写真という舞台の主題は写っている人やモノではなく、命の共生という絆であることに目が開かれるのである。



図1 石井鶴三との記念写真 1951年（昭和26年）開田村山下家庭にて中西悦夫撮影

3. 集合記念写真の人々

この写真の舞台は、開田村随一の豪家であった山下本家の敷地である。写真左端で、腰に手をあててまっすぐカメラを見据えているのは、開田村立西野小学校校長田中米男。その隣は開田村立開田中学校校長陶山光雄。そのやや斜め後ろの長身の男性は未詳。（後に開田村村長を務めた青樹操に似ているとの話もある）。その左手側前で手を前に合わせて立つ和服の女性は山下家8代目山下はる。その隣で、腕を後ろ組みにしたメガネを掛けた男性が9代目山下一平。そして、完成に至った回転台の上に乗る《木曾馬Ⅱ》を挟み、斜交いに遠くを見ているかのような作者石井鶴三。石井の背後、一人一人分離れて作品を覗くしぐさは、一平氏の妻山下いえ。前列に腰を下ろし、画面右方向を斜めに見上げる10代目山下ひさ。その隣で膝を立ててうつ向いて座るのは一平氏の弟11代目山下千一。千一と少し間を取り、しゃがんだ姿勢から空を見上げる石井の弟子笹村草家人。その隣で草家人の肩を見ているネクタイをした男性は、木曾教育会の役員と思われる。

石井鶴三の日記には、朝食後に始めた制作を1時近くにやめ、その際中西による撮影のあった

ことが記されている^{注2}。この写真はその時のもので、その後昼食を取り、支度を済ませ、1時15分には山下家を出発したという。9日間の滞在を終え東京へ帰る間際のワンカットという慌ただしさからは、写真中の人々の清々しい表情もあるいは演戯であったのかも知れないと思わされる。しかしながら、石井を囲う人々の個性あるしぐさは、実に画面を豊かに広がりあるものにし、双方にとって貴重なひと時を舞台劇のように記念したのである。

こうした撮影を監督した中西の演出能力には驚かされる。だが、それを可能にしたのは、ここが他ならぬ木曾馬の里だったからなのではないだろうか。もちろんこの写真の主演を務めるのは、関係者に囲まれた石井であったことは間違いない。しかし、石井は自作に寄り添いながらもやや後ろに下がって立ち、その分馬の存在感が強く前面に押し出されている。この写真の中で、唯一体躯の全体を晒しているのは制作台に据えられた作品だけであり、高さ40センチにも満たない小さな馬の像は実に堂々として輝いて見える。この輝きは、石井の造形法によることも確かであるが、何より、木曾馬の里の人々と馬の絆がその光となっているのである。

4. 木曾馬像の制作とお婆さん

記念写真中の陶山が『木曾教育』に綴った「木曾馬像の誕生」は、開田村における石井の制作をよく伝える^{注3}。その中で、石井が開田村に到着したのが昭和26年6月7日であること。木曾馬制作のモデルとなる馬が、泥月毛から神明へ、さらに神明の気性の荒さから雌の藤島号へと変更され、それが《木曾馬Ⅰ》となったこと。藤島号の制作中、石井は神明を手懐け、《木曾馬Ⅰ》の成ったところでその日の内に神明の制作に着手したことが記されている。これが《木曾馬Ⅱ》である。木曾馬像の制作期間は、両作品とも実質4日間ほどという短さであった。

陶山の文中で、石井の制作に関わった「お婆さん」と記述される女性がいる。このお婆さんは、おそらく山下本家の隣に住む山下親族の一人、山下はつと思われる。はつは、石井の滞在中、石井の制作とその馬の世話役であったようで、陶山の文章に登場する他、手綱を持つ姿が中西の記録写真に残されている（図2）。周囲に広く綱をめぐらし、通行注意の札（図3）を立て制作に集中する石井を「先生はえらいぞ、一日中立ちづめで、お茶もろくにあがらんで、疲れっさらしに、こんなことは誰も出来んよ。」と労い、夕食の場を和やかにしたのもはつであった。

神明の像が完成したその日、はつは「おらえの神明にそっくりだ。うれしいうれしい。」と声を弾ませたという。お婆さんの喜びには、神明への個人的な愛情とともに、木曾人が共有してきた馬を慈しむ「心」がほとばしっている。先天的に温順な木曾馬はその世話をする婦女子によく懐き、その扱いは家族同様だったという。寒冷な開田高原での農耕生活は、馬を一つ屋根の下に住ませ共生と呼べるほどの深い絆を育んできた。連綿と続いた人と馬のこの歴史が戦時統制下で途切れようとしたその時、窮地を救った純系雄馬最後の一頭が神明その馬だったのである。生命感漲る石井の作品は、その骨法たる心棒に由来するところであるが、神明の像に対するお婆さんの感激は、きっとその骨法が木曾馬の命の系譜のごとくに見えたからなのだろう。心棒の通った像はまさに生きているからである。



図2 泥月毛と山下はつ 中西悦夫撮影



図3 山下家に展示される立て札
「彫刻中は素通りお願いします」と墨書きされている。

5. 神明と第三春山号

農業の機械化が農耕馬と人々との関係を変える以前、木曾地方では昭和14年に制定された種馬統制法によって民有木曾純系種雄馬は去勢の対象となり、年次的に淘汰されていった。昭和18年の宝玉号を最後に、純系木曾馬の雄は根絶したと考えられていたが、戦後直後の畜産組合の調査によって、長野県更埴市八幡の武水別神社に御神馬として奉納されていた黎明号が、純系種馬の適格馬であることが分かった。この奇跡的に見出された雄馬が後の神明であり、神明は、その後の畜産組合関係者の熱心な働きかけが叶い昭和25年に木曾に帰ってきた。

戦中、厳しい統制法をくぐって神明が去勢を免れたことはまさに奇跡であるが、それは木曾馬を守る木曾人の秘密裏の抵抗があった故である^{注4}。終戦を迎えた昭和20年、10才以上の雌馬に純系がわずかに残っていたことも同様で、こうして木曾馬を守る抵抗の歴史が戦後には木曾馬の復元運動に転化したのである。ほどなく神明は新開村、開田村、山岳村において種雄馬として供用され、昭和26年4月、木曾純血種雌馬鹿山号との交配によって名馬第三春山号が誕生することになる。この第三春山号が後に果たした木曾馬復元の役割には絶大なものがあるが、つまりは神明が現存するすべての純系木曾馬の祖に帰結するところの馬ということなのである。

石井が神明と出会ったのは、そうした木曾馬保存活動の最先端においてであった。神明の姿を今日に伝える写真は少ないが、木曾馬像の制作時に山下一平に押さえられる神明の姿が中西によって撮影されている(図4)。やや痩せた体躯ではあるが、ここに見られる鹿毛と黒い鬣たてがみは、子である第三春山号によって偲ぶことができる(図5)。しかしながら、剥製には無い生命感が石井の作品に明らかであり、それが山下家の人々の感動を呼んだのである。神明を制作した《木曾馬Ⅱ》は、後にブロンズに鑄造され桐箱とともに山下家に贈られた(図6)。

石井鶴三と木曾人の奥行き—木曾馬神明号制作に関わって—



図4 神明と山下一平氏 中西悦夫撮影



図5 第三春山号の剥製 開田郷土館



© Keibunsha, Ltd. 2020 /JAA2000019

図6 石井鶴三《木曾馬Ⅱ》と桐箱 県宝山下家住宅にて

6. 作品の奥行と人の心

現在は県宝に指定され、木曾馬の資料館ともなった山下家住宅を訪れるなら、木曾人と馬との間には想像を超える奥行きのあることを実感させられるだろう。石井が手掛けてきた作品1点1点には、常に豊かな背景が関係付くものであるが、殊に木曾における島崎藤村木彫像と木曾馬像の

両制作が我々に伝える物語には感嘆を禁じ得ない。これは、単に作品自体のクオリティの高さによるばかりでなく、それぞれのモチーフが湛える世界の豊かさとの共鳴から来るのである。石井の制作が、人をして作品それぞれの背景を探訪させるのは、彼が対象の見えるところに捉われることなく、その奥行きに焦点を合わせたからである。つまり、石井の木曾馬像を味わい噛みしめるためには、山下家住宅を訪れその空間が語り掛けるところに傾聴することが大切となる。なぜなら、そこは木曾馬像の制作現場であっただけでなく、木曾人の伝統的な営みが代弁されている場だからである。

山下家住宅入り口の左手側は馬屋となっており、当時のままの状態で保存されている。冬には外がマイナス20℃以下にもなる開田高原。馬たちは、春が来るまではその馬屋から一步も出ることはない。壕のように深く掘り下げられた馬屋の底は、長い冬の間投げ込まれた干し草が集積し、春が来る頃には人の立つ土間に馬が顔を出す。否、馬が顔を出すことで人は春の近いことを知ったのである。

7. 馬への慈しみと別れ

山下家住宅の馬屋壁板の上部には、木曾人の心が滲む写真が掲げられている（図7）。撮影者は当時この地方で教員を務めていた澤頭修自。馬に頬を寄せて目を閉じているお婆さんは、撮影当時馬橋で第三春山号の世話をしていた坂口末吉の妻である。お婆さんは、馬の鼻に頬を寄せて目を閉じる中に何を思ったのだろう。馬の優しい目を見るなら、我々には察せないその心境がきっと馬に共有されていたであろうことが分かる。



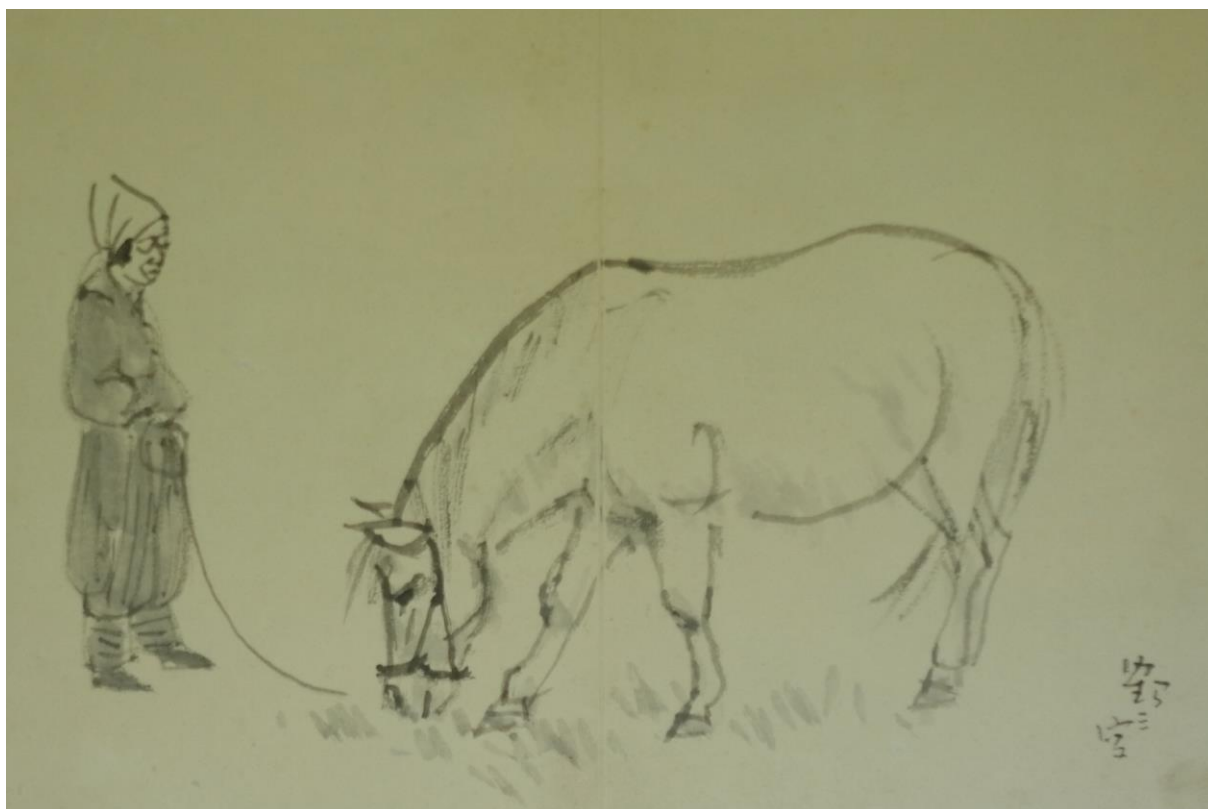
図7 第三春山号を慈しむ

昭和50年、種馬としての使命を終え死期も迫った第三春山号は学術研究に供すため、名古屋大学で安楽死させられることとなった。この決定に関しては、全国から様々な意見が寄せられたというが、純系種木曾馬の保存と復元のための苦渋の選択であった。当時、開田小学校の近くで飼われていたという第三春山号は、名古屋大学に向けて帰らぬ旅に発つその日、地域の人達総出の中、子供たちの歌に送られていった。当時の状況を知る加村氏は、その場の皆が涙したことを語ってくれた。

8. 一枚のスケッチ

加村氏は、これまで一度も公開されていない一枚のスケッチを披露してくれた（図8）。これは、昭和26年6月、山下家に到着した石井が手綱を持つはつと泥月毛を描いたものである。首を少しひねって草をはむ馬の姿は、後にモデルが藤島号に代わられた《木曾馬Ⅰ》そのものであり、伏し目がちに姉さんかむりの女性もはつとすぐに特定できる。石井は、このスケッチを描いた後、そのままはつにプレゼントしたという。そして、平成28年、スケッチははつの孫である山下右衛門より加村氏を通じて山下家住宅に寄贈された。

スケッチが描かれた時より65年。市に売られた木曾馬が元の馬主の元に戻ってくる逸話にも似て、描かれた馬は山下本家に帰ってきたのである。はつの握る手綱が緩んでいるところに、木曾馬の温順さと馬への思いが表れている。だが、実際に馬が市場へ曳かれる時、馬は悲しんで抵抗したという。それでも手綱を強く引くと、馬は大きな目いっぱい涙を溜めて従った。当時、馬市場は木曾福島にあり、山の一本道を実に8時間以上かけて馬は曳かれていったのだという。木曾馬は農耕馬として働かされたが、市に曳かれる時、人は決して馬に乗らなかった。それは、売り物だからであり、また綱付けに慣らさせるためでもあったが、それ以上に、家族同様に暮らした馬に対する愛情からでもある。本稿の冒頭、石井が制作中に詠んだという歌は、こうした木曾人の心の真実に触れたものなのである。



© Keibunsha, Ltd. 2020 /JAA2000019

図8 はつと泥月毛 石井鶴三のスケッチ 県宝山下家住宅所蔵

注

- 注1 基敦、木曾馬の記念写真に見る創造性 ―演戯する意識を失った現代とは―、『信州大学附属図書館研究』第八号、信州大学附属図書館（2019）、pp. 51-56。
- 注2 『石井鶴三日記 III』、形文社（2005）、p. 297。
- 注3 陶山光雄、木曾馬像の誕生、『木曾教育』第42号、木曾教育会（1974）、pp. 134-137。
- 注4 木曾馬復興に貢献の大きかった原義亮の養嗣子である原恒男氏は、筆者のインタビューの中で木曾馬を巡る木曾の人々の歴史観について、それは「抵抗の歴史であった」旨を強調されていた。恒男氏は、1963年に木曾福島で内科医院を開業。以来、50年以上に亘って地域医療に尽力し、現在も長男とともに診療の第一線に立つ。

参考文献

- 1 伊藤正起、『木曾馬とともに』、開田村木曾馬保存協会（1996）。
- 2 原文子、『木曾馬のきた道』、自費出版非売品図書（2007）。
- 3 『木曾教育』第42号、木曾教育会（1974）。

図版出典

- 図1 木曾教育会所蔵
- 図2 木曾教育会所蔵
- 図3 筆者撮影
- 図4 木曾教育会所蔵
- 図5 筆者撮影
- 図6 筆者撮影
- 図7 県宝山下家住宅所蔵
- 図8 県宝山下家住宅所蔵

謝辞

木曾馬の里・木曾馬乗馬センター局長中川剛氏、県宝山下家住宅管理人加村金正氏、原医院院長原恒男氏、原知子氏からは、木曾馬と木曾地方の歴史に関し多くをご教示頂いた。また、木曾教育会事務局長梶原博雄氏並びに事務局職員の方々には、中西悦夫撮影木曾馬像関連写真の参照とその使用に御協力を賜った。ここに記し、感謝の意を表す。

*本稿は科学研究費補助金（基盤研究C・課題番号：18K00118）による研究成果の一部である。